

- 1 . 実験に不要な物は実験台上に置かないこと。
- 2 . 秤量する際、天秤の上に葉さじを置いていた選手がいた。
天秤の上に物を置くのはよくない。
- 3 . 検水を取り扱う前に、よく振り混ぜて均等な状態にすべきである。
- 4 . 検水が入っている容器に直接ピペット等を入れるのは汚染のリスクがあるので、ビーカー等に分取してから扱う。
その際、検水の全量に移してしまつては汚染のリスクがあるので、適切な量を分取する。
(例えば、必要な量が 10 ml であれば 20 ml を分取する、など)
- 5 . 滴定操作をしているすぐ横に報告書を置くのは、汚れるリスクが高い。
メモ用紙は仕方ないにしても、報告書はきれいな状態で記載できる体制を取った方がよい。
せっかく実験台を 2 台分使えるのだから、有効利用するとよい。
- 6 . 本滴定において、検水の希釈操作を行うときはメスフラスコを用いるのが基本である。
希釈を正確にしないと、測定値の誤差につながる。
- 7 . メニスカスを確認する時間が短かった。
少し間をおいて確認した方がよい。
- 8 . ホールピペットについては、すぐに残液を出す選手が多かった。
残液はピペットをほぼ垂直の状態先端を器壁に付けたまま排出時間を 10 ~ 20 秒程度待つてから出した方がよい。
- 9 . 終点が近くなると、ビュレットの操作を片手で行う人と両手で行う人とがいた。
両手の方が微調整しやすい人は、無理に片手にこだわらなくてもよい。
- 10 . 終点については、止めるのが早かったり行き過ぎたりしていた選手がいた。
終点の見極めを検証した方がよい。
- 11 . レポートに反応式を書いていない選手が多かった。
- 12 . ファクターを小数第 4 位まで書いていた選手がいたが、求めるのは第 3 位まで。
- 13 . 予備滴定について、全体的なことは書かれてあったが、具体的な数値を書いていない選手がいた。
- 14 . 相対誤差が 1 % 以内という選手がいた一方で、計算ミスをしている選手が多かった。
検算をした方がよい。